

二〇二四年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】 一 この試験の問題文・設問は、1ページから16ページに印刷されています。

二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。

三 文字は、正しくきちんと書きなさい。

四 、。。「」はそれぞれ一字と考えなさい。

一

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「深夜0時に公園の裏の自動販売機はんばいきの取り出し口に手を入れると、引きずりこまれるんだって。」

いちかちゃんが言う。ふたばちゃんとみつえちゃんと私は、「へえ。」と声をそろえる。その反応はんのうに満足したいいちかちゃんは、いじわるそうな視線をのださんへ向ける。

「でも、うわさが本当かどうか、試ためさなきや分かんないよねえ。」

いちかちゃんが大げさのため息をつく。

<sup>A</sup>「だれか試しに行つてくれないかなあ。」

「だれか」の部分のことさら強調して言う。ふたばちゃんとみつえちゃんと私は、ちらと視線を合わせる。

「のださんの家つて公園からいちばん近いよね。」

ふたばちゃんが言う。

「のださん行つてきなよ。」

みつえちゃんが言う。

「そ、そうだよね。のださんなら怖いこわのも平気そうだし。」

私が言う。

のださんは何も言わずにじつとうつむいている。肩かたに

かかる髪かみが顔をかくして、表情は見えない。

「じゃあ、決まりだね。」

いちかちゃんがパンツと手をたたく。

「ふたばちゃんたちもこう言っているんだし、のださん確認してきてよ。」

「……。」

「ねえ?」

「……夜中に外に出るなんて、無理だよ。」

髪の毛の間から、ほそりとのださんが小さな声を出す。

「ええ?」

いちかちゃんが大きな声で聞き返す。

「……無理、夜に外出なんてできない。親おじに怒られる。」

「大丈夫だいじょうぶだよ。見つからないようにこそつと出て行って、ささつと試して、またそつと帰ればいいんだよ。のださん、そんなことくらいできるでしょ?」

いちかちゃんがのださんの顔をのぞきこむようにして言う。

のださんはさつと顔をそむけて、小さな声をしぼり出した。

「……分かった。」

「約束だからね!」

いちかちゃんはまた大きな声で言った。

それが金曜日のことだったから、私たちが次に顔を合わせたのは、土曜・日曜をはさんで、月曜日になってから。だから、私たちはすっかり例の自動販売機のことには忘れていた。

「おはよう。」

「おはよう。」

いちかちゃんの席の周りに、ふたばちゃんとみつえちゃんと私が集まる。いつもの朝。のださんがまだ来ない。けど、別にだれも気にしない。例の話をすっかり忘れているから。私たちは、わいわいと昨日更新こうしんされた動画チャンネルの話で盛り上がっていた。

「おはよう！」

入り口から元気なあいさつが聞こえて、その瞬間、教室がざわめいた。何だろうと、私たちも振り返ると、あいさつの主はまっすぐこちらへ近づいてきた。

「おはよう！」

私たちの前に立ち止まって、のださんが大きな声で言った。はつきりと私たちを見ながら。私たちはほかんとおど

ろいて、返事するのを忘れた。だって、いつもののださんなら、もっと聞こえるか聞こえないくらいの小さな声であいさつする。それで、いちかちゃんに「何て？」って聞き返される。

「お、は、よ、う！」

**B** のださんがまたあいさつをして、ようやく私たちもわたわたと返事をした。

「お、おはよ……。」

「行ってきたよ。」

「え？」

「自動販売機。」

のださんがそう言ったときもまだ、私たちはだれも金曜日の話を思い出せずにきょとんとした。

「ちっ。」

たぶんいちばん近くにいた私にしか聞こえなかったと思うけど、のださんは確かに小さく舌打ちした。

「自動販売機、深夜0時に。行ってきた。」

「ああ。」

私たちは間の抜けた返事をした。本当に行ったんだ。

「いたよ。」

「えっ。」

「取り出し口に手を入れたら、中に変なのがあったよ。」

のださんは言い聞かせるみたいにゆっくり言った。

「え、何がいたの？」

「お化け？」

「一人で行ったの？ 親に怒られなかった？」

ふたばちゃんとみつえちゃんと私は矢継ぎ早はやに質問した。親にだまってパジャマのままこっそり抜け出して公園まで行つたと、のださんが答えている途中とちゅうで、いちかちゃんが吐はき出すように言った。

「ばっかじゃないの。お化けなんて、いるわけないじゃん。」

C いちかちゃんはすこぶる機嫌きげんが悪そうだった。「そうだよね。」と私たちがあいづちを打つより先に、のださんが口を開いた。

「いちかちゃん、うそついたの？」

のださんのはつきりとした大きな声が教室にひびいた。それまで教室のあちこちでおしゃべりしていたクラスメートたちはしんと静まり返り、みんなが私たちの方を見た。「いちかちゃんが、公園裏の自動販売機にお化けが出るから見に行けつて言ったんだよね。だから、あたし夜中の0

時に家を抜け出したのに、いちかちゃんうそついていたの？」

教室中に聞こえるように、のださんは声を張り上げる。

クラス中がちらちらとこちらを見て、ひそひそ何か言っている。いちかちゃんはさつと顔を真ま赤かにしてうつむいてしまった。

別にもうどうでもいいけど、のださんがつぶやいて自分の席もとに戻もどっていくのと同時に始業のチャイムが鳴って、先生が入ってきて、この話はそれきりになった。

次の休み時間から、いちかちゃんのはださんに話しかけなくなった。移動教室も声をかけずばらばらだったし、下校のときにも誘さそわなくなった。けれど、のださんは平気な顔で、休み時間は一人で本を読んでいたし、水曜日にはもう別のグループの子に宿題を教えていた。

それで、私たちのグループで、もともとのださんの役割だったのが、私に回ってきたのだ。

いちかちゃんは、絶対に答えられないような難しい質問や、ややこしい話は、必ず私に振るようになった。それで答えられなかったら、「ええ、そんなことも分からないの。」と大げさに言う。ふたばちゃんとみつえちゃんもいっしょ

になって笑う。二人だつて答えられないくせに。

「ものまねしてよ。」って私だけに言う。やりたくないけど、また「空気読まない。」って言われたくないからやってみせると、「全然似てない！　ねえ？」って大声で笑う。私は早くももう限界だつた。

だから、金曜日の放課後、先生に呼ばれたからとうそをついて、いちかちゃんたちを先に帰らせて、下校途中ののださんを一人で待ちぶせした。

「のださん！」

公民館のかけから声をかけると、のださんは少しおどろいた表情をした。けどすぐに落ち着いた声で返事した。

「何？」

「私たちのグループに戻もどっておいでよ。うそついたこと、もうだれも怒ってないからさ。」

「うそじゃないよ。」

のださんは答えた。

「でも……。」

お化けなんているわけない、うそに決まってる。そう言おうと思ったのに、声にならなかった。本当は私も疑っているからだ。——もしかして、つて。

だつて実際に、自動販売機に行った日からののださんはすっかり変わってしまった。それこそ、お化けに会うとか、不思議な体験でもない限り、ありえないくらいに。

「……でも、のださんが戻ってきてくれないと、私が困るの……。」

何とか消え入りそうな声をしぼり出す。本D当に、情けなさすぎて消えてしまいたい。

「何で？」と聞き返したのださんに、「さみしいからだよ。」とか平気で答えられるほど厚かましくはなれなかった。

私がいまだまりこんでいると、のださんはふうとため息をついた。あたしだっていやだよ、という思いが伝わってきた。怒って行ってしまうかと思っただけれど、のださんは私に向かつて言った。

「じゃあ、いっしょに公園裏の自動販売機に行ってみる？」

「え？」

ぽかんとしていると、「いやなら別にいいけど。」と言うので、私はあわてて「行くよ！　行く、行く！」と返事した。例の自動販売機に行ったら、私も変わるだろうか。

土曜日の深夜0時に公園で待ち合わせした。

けど、そもそもどうやって夜中に家を抜け出すのかに頭をなやませた。何かあつてもすぐに逃げられるように自転車で行くことにした。カチャンと開錠かいじょうする音でばれないように、日中のうちに鍵かぎを差しておいた。ふとんの中にぬいぐるみを身代わりに寝かせて、そつとベランダから抜け出した。

夜の街は昼間とは秀ふん囲い気きがちがう。あちこちの家にはまだ明かりがともし、テレビの音なんか聞こえてくるのに、街灯に照らされた道はなぜかいつもよりしんと静かな気がした。私は全速力でペダルをこいだ。

公園の入り口に着くと、すでにのださんが待っていた。「ごめん、おそくなって。」

と、私が言い終える前に、「行く。」と、のださんは公園の裏に向かつて歩いていく。「こんな時間だし、さつさとやっちゃおう。」と言って、別に怒っているわけではなさそう。

公園の裏、白い光を放つ自動販売機。その一角だけが橙だいだいいろ色の街灯に照らされて、薄暗うすぐらい中でひとときわ明るいに、なぜかいつそう不気味な感じがする。

「ほ、ほんとお化け出るの？」

「さあ。」

私がこんなに怖がつているというのに、のださんはつれない。きつとうそだからだ、そうだ、そうにちがいない。早く終わらせて帰ろう。

ポケットから小銭を取り出し、投入口に入れる。いつものミルクセーキのボタンに指をのばす。

「だめだよ。」

のださんが言った。ボタンを押す寸前でぴたりと指を止めて引っこめる。

「今、何考えてた？ <sup>F</sup>いつもと同じじゃ何も変わらないよ。」

のださんがじつとこちらを見つめながら言う。

「え、えつと、じゃあ、コーラとか？」

私が言うと、のださんがぶはつと笑った。

「すずきさんて、ちよつと変だよね。」

「えつ、のださんほどじゃないよ。」

そう返したら、また笑った。笑いやむと真面目な顔になり、のださんは言った。

「あたしはね、いちかちゃんからこんな言い方されるのは、これが最後になりますようにって、念じながらボタンを押

したよ。そのためには絶交されてもいいって。」

「すぎさんは？」と、のださんはまっすぐにこちらを見つめる。

「私は……。」

のださんと同じだと言おうとして、やっぱり言い直した。

「私も今みたいな感じはいやだけど、でも。……私が転校してきてだれからも話しかけられなかったときに、いちばん最初に話しかけてくれたのがいちかちゃんだったの。いっしょに帰ろうよ、って。私、いちかちゃんに一度もいやだって伝えたことがないから、いちかちゃんは私がいやがっているって気づいていないのかもしれない。だから、まずは、はっきりいやだって言ってみる。」

そう言うと、のださんは小さく笑った。

「お人よしだね。」

「のださんほどじゃないよ。」

「あはは。自分でもそう思う。あたし、すぎさんからけっこうひどいこと言われたのね。」

「……ごめん。」

「別にもういいよ。」

あまり期待されていなそうだったので、「次からは、ちゃんと気をつけるから！」と、にぎりこぶしを作って言う、

また笑われた。

「こんなに」

X

のださんは初めて見たかもしれない。

「そして、こんなに」

Y

私も、たぶん初めてだ。

私たちはいつも、いちかちゃんを中心に会話していたから。

「グレープジュースだよ。」

「え？」

「押すのはグレープジュースのボタン。」

のださんが右端みぎはしのボタンを指しながら言う。のださんが好きなやつだろうかと思いつつ、紫むらさきと白のストライプの缶かんを見つめていると、のださんも財布から小銭を取り出した。

「一人で行かせるのは心配だから、あたしもいっしょにボタンを押してあげる。」

と言う。

「えっ。やっぱり取り出し口に入れたら、どこかへ連れて行かれちゃうの？」

私がおどろくと、のださんはふふと笑った。

でも、のださんがいっしょにいてくれるなら何だか大丈夫な気がする。私は今度こそ右端のボタンに向かって指をのばした。

(香久山ゆみ「自動販売機」による)

問一——線部A「だれか試しに行ってくれないかなあ。」「だれか」の部分をごとさら強調して言う」とあるが、これにはいちかちゃんの、どのような意図が込められているか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア のださんは行きたくなさそうな反応なので、「私」に試しに行かせようという意図。

イ のださんが試しに行くように話を強引に進めることを、「私」たちへ促すという意図。

ウ もしもお化けが出たら怖いので、自分以外のだれかに試しに行ってもらいたいという意図。

エ 霊感が強そうなのださんに行ってもらえるように、「私」たちからもお願いさせようという意図。

問二——線部B「のださんがまたあいさつをして、ようやく私たちもわたたと返事をした」とあるが、「わたたと返事をした」のはなぜか。説明しなさい。

問三——線部C「いちかちゃんはすこぶる機嫌が悪そうだった」とあるが、なぜか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「私」たちが、お化けの話で盛り上がっていて、怖くなってしまったから。

イ 自動販売機に関するうわさを、自分で確かめれば良かったと後悔しているから。

ウ 自分の作り話であるお化けの話をして、のださんが話題の中心になっていたから。

エ 自分が話した、お化けが出るという嘘を信じているので、申し訳なくなりましたから。

問四 — 線部D「本当に、情けなさすぎて消えてしまいたい」とあるが、何を情けなく思っているのか。説明しなさい。

問五 — 線部E「のさんはつれない」とあるが、「つれない」という言葉の意味として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 落ち込んでいる様子                      イ のんびりしている様子

ウ 冷淡れいたんでよそよそしい様子                      エ 気丈まに振る舞っている様子

問六 — 線部F「いつもと同じじゃ何も変わらないよ」とあるが、のさんは、「私」がどうするべきだと思っているか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の好きなものばかり選ぶのではなく、たまには違ちがう飲み物も試すべきだ。

イ 取り出し口にお化けを出すためには、いつも買わないものに手を出すべきだ。

ウ グループに戻ってほしいと思うのなら、もつとはつきりと自分にお願いをするべきだ。

エ 自分はこうなりたいのだということを考え、決意を固めたうえでボタンを押すべきだ。

問七 空欄 、 にあてはまることばを、次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

- ア 怒る      イ 喜ぶ      ウ 笑う      エ 慌<sup>あわ</sup>てる      オ 悲しむ      カ しゃべる

問八 — 線部 G 「の皆さんがいつしよにいてくれるなら何だか大丈夫な気がする」とあるが、「私」がそう思えるようになった理由を、七十五字以内で説明しなさい。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

信州大学にダンゴムシの研究をしている森山徹さんという先生がいらつしやつて、以前、雑誌「ケトル」で取材をしました。彼は過去一五年間で一万匹にもおよぶダンゴムシの研究をして、その結果「ダンゴムシにも心がある」というのです。

【 1 】、ダンゴムシには右に曲がったあととは左、次は右というようにジグザグに歩く性質があるのですが、X 同じ方向にばかり曲がり続ける個体がいるそうです。つまり「本能」を投げ出してしまうようなダンゴムシがいるわけです。

さらに、ダンゴムシを水に囲まれた鳥のようなどころに置くと、二一匹中、三匹ほどの確率で突如泳ぎだしたといえます。通常、ダンゴムシは水に入ると数十分で窒息してしまうにもかかわらずです。

これらの結果から、極限状況に置かれたダンゴムシは、本能ではない「隠れた活動部位」を働かせたと考えられる、つまり「心」があるのだそうです。

こんな話を聞いても、実生活に直接役立つわけではあり

ません。けれども、私はこれを聞いたとき、心の底からおもしろいと思いました。

さらに、アフリカの大陸で生まれてから、ベーリング海峡を越えてアメリカ大陸にまで渡っていった人類の大移動との類似も感じられます。ニュージーランドの先住民マオリは、タヒチなどから海を渡ってきたポリネシア人が起源だとされますが、B その先に島があるかどうか定かでないのに海を渡っていく決断をした人と、泳ぐダンゴムシはどこかで共通しているのではないかと、そんな気持ちになります。

研究している先生には失礼ですが、一般の人には無駄かもしれないダンゴムシについての知識が、こうした知的冒険にさそってくれる楽しさ。うまくはいえませんが、それは役に立つか立たないかを超えたなにかです。

学者の人たちは、直接的に役立つかどうかということよりは、基本的には自分の興味関心に正直に、好きなことを、いつてしまえばマニアックに研究しています。だから役立つかどうかより、とりあえず新しいことを知って、それを説明したいのです。物理学者なら、世界のあらゆること、つまりこの世のものはどういう物質からできていて、

それらの関係がどうなっているかを、ひとつの大きな理論体系で説明したい。

でも、考えてみれば、冥王星<sup>めいおうせい</sup>について知っていても暮らしが豊かになるわけではないし、どうして宇宙が生まれたのかがわかっても、私たちの日常生活はたぶん変わりません。けれども、それがわかっただら、ものすごいですし、何よりもおもしろいと感じます。

ですから、もしかしたら社会の中では壮大な「無駄な研究」が大量にされているかもしれない。そのうちのいくつかは、インターネットであったりGPS衛星であったり、iPS細胞であったり、世の中の役に立つものになる。ただ、それはたくさんの無駄があるからこそだともいえるわけです。

企画<sup>きかく</sup>などの仕事の面においても、こういう無駄なことが背景にあるほど、深みがあったり、説得力があったりするものになる。結局、いろいろな人の仕事を見ていても、無駄な中からすぐ本質的なことが生まれることが多いように感じます。

たとえば、企画を考えるときにパソコンに向かって\*グーグルで検索<sup>けんさく</sup>している人がいます。

ネットで情報を探すのはとても便利になりました。

Y 図書館に通う必要もなくなった。でも、検索結果というのには誰が見ても同じものが出てきます。それを各人の視点で加工して企画やアイデア<sup>\*しやうか</sup>に昇華<sup>しょうか</sup>していくわけですが、そこに自分独自の情報を組み込めると、人と違う<sup>ちが</sup>発想を生み出しやすい。

だから、みんなと同じ武器を持って戦うよりは、無駄なもの<sup>D</sup>をいっぱい持っている人のほうが最終的に戦力になるような気がします。

本屋に行くのは、基本的なスタンスとしては無駄なものに会いに行くというものです。この「無駄なものに会える幸せ」は、本屋の本質といってもいいくらいだと思います。

本屋の棚の前をうろろろするのは、膨大な無駄な知識の世界に自分が浮遊<sup>ふゆう</sup>しているような感じで、それは純粋<sup>じゆんすい</sup>に楽しい。私が本屋好きであるのは、そういう知識の中で浮遊している自分が好きだからかもしれません。

SF作家のアイザック・アシモフが「人間は無駄な知識を得ることで快感を覚える唯一<sup>ゆいいつ</sup>の動物である」といったように、無駄は人間の特権です。

あまり難しく考えなくても、ビジネスにしろ、人づきあ

いにしろ、検索で解答に一直線に行くより、寄り道していろいろなものに触れながら進んだほうが楽しくない？というのが私の考えです。これは「迂回性\*うかいせいのすすめ」と呼んでもいいでしょう。

そのように、無駄や迂回を楽しむための本屋が、もう少し評価されてもいいのではないのでしょうか。

無駄なものはないというと、どこか精神論めいていますし、役に立たないことが楽しいというと\*ノスタルジーにひたっているように\*じょうちよ情緒めいて聞こえます。

【2】、それよりも単純に無駄があつたほうが生活は豊かになつて、その豊かさこそがおもしろいことを生み出すのではないかと思うのです。その意味で、無駄は無駄ではない。

世の中が忙いそがしくなつて、ネットで直接的に欲しいものを得られるようになったこともあつて、いまは必要かどうかかわからないものがないがしろにされすぎている気がします。

基本的に、本は読むまで役に立つかどうかともわからない、不思議な商品です。タイトルや著者である程度はわかるけれども、読んでみたら見当違いである可能性もあるし、す

でに知っていることが書かれているかもしれません。

しかし、最近の本をつくる出版社の側も、ますますに必要情報が載のつています、というような本を出しすぎている。それは読者が求めているからという理由もあつて、どちらが先というものでもありませんが、世の中全体が「役に立つ病」にかかつているのではないのでしょうか。

年収三〇〇万とか、投資で儲もちかるとか、とにかく効能を謳うたうような本が多いわけですけど、そういう種類の情報は、情報の中の Z 一部でしかありませんし、そんなに役立つ情報が溢あふれているなら、みんなが年収三〇〇万にならなければいけません。

情報は役立つものであつて、本にはその役立つ情報が載のつていなければならない。そう思われているふしがありますが、必ずしもそうではないことに気づくことが大切です。

(中略)

読んだ体験やそこで考えたことは、その人のその後の人生のどこでどう役立つかわかりません。もしかしたら人生の終わり、死ぬときになつて、「ああ、そういうことだったのか」と気づくかもしれない。

もちろん、困ったことがあつたら本屋に駆け込んで役立つ情報を探すと\*たいしやうりょうほういう対症療法もあるけれど、買うつもりもなかった本は風邪薬かぜぐすりというより漢方薬的で、少し遅れておくじわじわ効いてくるものです。

本屋は、いますぐ役に立たないものの宝庫です。本屋を情報Eの場ととらえるのではなく、遊びの場としてとらえてみれば、学者の研究と同じで、その中であれやこれやと探すのは非常におもしろくて、贅沢ぜいたくなことなのです。

（嶋浩一郎『なぜ本屋に行くか』アイデアが生まれるのか』による）

【注】

\*雑誌「ケトル」——最高の無駄がつまったワインターマ雑誌。

\*マニアック——あることに極端きょくたんに熱中しているさま。

\*グーグル——インターネットの情報検索サービス。

\*昇華——物事が一段上の状態に高められること。

\*スタンス——立場や態度。

\*迂回——物を避けて遠回りすること。

\*ノスタルジー——過ぎ去った過去をなつかしむ気持ち。

\*情緒——事に触れて起こるさまざまの微妙びみょうな感情。

\*ないがしろ——あるものをないかのように軽んじること。

\*投資——利益のために多額の金銭を企業などに投入すること。

\*謳う——明確に文章で表現・主張する。

\*対症療法——物事の目前の状況に応じた処理のしかた。

問一 — 線部A「ダンゴムシにも心がある」とあるが、その理由を説明している部分を本文中から四十二字で採し出し、か解欄に合うように、最初と最後の五字を答えなさい。

問二 空欄【 1 】【 2 】にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし イ たとえば ウ なぜなら

問三 空欄 

X
---

Z
---

 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア ごく イ まれに ウ わざわざ

問四 — 線部B「その先に島があるかどうか定かでないのに海を渡っていく決断をした人と、泳ぐダンゴムシはどこかで共通しているのではないか？」とあるが、どこが共通しているのか。筆者の考えとして最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 人もダンゴムシも追い詰められると、本能にしたがって新たな生きる場所に希望を求めて行動をする点。
- イ 人もダンゴムシも本能にしたがって環境を変えることはしないが、未知の海へと移動する冒険心はある点。
- ウ 人もダンゴムシもこの先のことやどうなるかわからないのに、本能を無視した危険な行動を取ってしまう点。
- エ 人もダンゴムシもできるかできないかわからないのに、可能性を信じて行動すべきだと思ってしまう点。

問五 — 線部 C 「たくさんの無駄」とあるが、それはどのようなものか。ここでいう無駄の意味を考えて答えなさい。

問六 — 線部 D 「みんなと同じ武器を持つて戦うよりは、無駄なものをいっぱい持っている人のほうが最終的に戦力になるような気がします」とあるが、なぜ「同じ武器」を持っている人が最終的に戦力にならないのか。「同じ武器」とは何かを明らかにして、説明しなさい。

問七 — 線部 E 「本屋を情報の場ととらえるのではなく、遊びの場としてとらえてみれば、学者の研究と同じで、その中であれやこれやと探するのは非常におもしろくて、贅沢なことなのです」とあるが、本屋を「遊びの場としてとらえ」た方が良いのはなぜか。「遊びの場」とはどのような場かをふくめて説明しなさい。

三

次の①～⑤の――線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① 病人をカ|ン|ゴ|する。
- ② シ|ユ|ウ|シ|ョ|ク|活|動|に|取|り|組|む|。
- ③ ラ|ン|ボ|ウ|な|使|い|方|を|し|て|は|い|け|な|い|。
- ④ 期|限|を|一|週|間|エ|ン|チ|ョ|ウ|す|る|。
- ⑤ お|墓|に|花|を|ソ|ナ|え|る|。

